

野蒜復興新聞

野蒜まちづくり協議会

東松島市へ要望書提出

10月に復興部会が起案し、役員会が承認した野蒜地域の復興に関する要望書が正式に東松島市、阿部市長へ提出されました。起案時点で大きく3項目だった要望内容に、1項目を

追加しました。野蒜まちづくり協議会は、東松島市の要望内容への善処を期待する共に、今後も継続的に地域住民の声を反映させていただきます。



↑11月20日、東松島市役所にて

復興へ向けて一歩ずつ、頑張ろう野蒜

10月に復興部会によつて起案され、役員会によつて承認された野蒜地区の復興に関する要望書が、11月20日、正式に東松島市、阿部市長へ提出されました。提出に先立ち、11月5日に開催された第6回復興部会や、11月18日に開催された三役会(会長、副会長、事務局)にて要望書の精査を行いました。そして、11月21日に開催された野蒜まちづくり協議会役員会にて、要望書提出の報告が行われました。復興部会から起案されて

いた3項目の要望に、さらに「4.元地の利用計画の明確化」の1項目を追加し、大きく4項目の要望内容(※参照)となります。今回の要望書提出は、平成24年10月16日に初めて要望書を提出してから2度目となります。前回は、元地の利用計画を主とした要望書を提出しました。今回の要望書では、それら利用計画の現状の明確化を要望すると共に、2年前には見えなかった課題も含め、取りまとめられました。要望内容に対する東松島市からの回答については、国や県の予算も絡むことであり、早急には回答できないとしながらも、地域住民

要望内容※

1. 仙石線全線開通に伴うもの(安全対策、防犯対策、インフラ整備状況等の明確化)
2. 新東名駅と新東名地区の間にエスカレーター設置
3. 高台造成に伴う土壌流出等雨水対策
4. 元地の利用計画の明確化

今年の野蒜復興新聞は
本号で最後だよ。
皆さま、よいお年を。



からの要望として真摯に受け止め、東松島市として善処していきたいとしていきます。野蒜まちづくり協議会は、今後も様々な課題が出てくることとが予想されています。野蒜まちづくり協議会、および復興部会は、継続的に住民の声を反映させていただきます。

野蒜北部丘陵振興協議会 住みやすい街に向けて



↑11月19日の第5回高台移転部会の様子

10月29日に開催された野蒜北部丘陵振興協議会の戸建住宅・災害公営住宅部会の第2回合同部会が開催されました。本会の中で、平成29年4月から導入が始まる地区自治会制度について概要が東松島市から説明がありました。今後、地区自治会設立に先立ち、①新たな地区自治会の規約の作成、②自治会費やルール統一、調整、③自治会長を含む役員

11月19日に開催された第5回高台移転部会では、低層住宅地区のまちづくりルール(案)は基本的に了承されたことが報告された。今後、全体会等の場で正式に決定する手続きが進められます。

選出、④他の関係組織との調整、⑤業務や役割の分担化が必要な手順となりま

す。併せて公共施設等ハード面のまちづくりを進めていきます。

↓見学会の様子



11月2日、あおい地区(東矢本駅北)において、災害公営住宅建設現場見学会が実施されました。災害公営住宅を実際に目で見て、説明も聞くことが出来る貴重な機会ということもあり、会場にはご家族連れをはじめ、多くの来場者の方で賑わいました。会場には、今後、野蒜北部丘陵団地に建設予定の公営住宅(1LDK、2LDK、3DK、3LDK、4K)の内部見学が可能で、参加者は、屋内を見ながら建設業者からの説明を熱心に聞いていました。見学会のアンケートでは、実際に、公営住宅の具体的なイメージができて良かった等の感想もありました。

あおい地区(東矢本駅北) 災害公営住宅見学会実施

鳴瀬川から松島湾まで、新島、亀岡、東名を横断する全長3.2kmの東名運河は、日本最初の近代港湾建設「野蒜築港」の際に掘り開かれました。開港は明治16年(1884)2月4日に開始、翌年(1885)2月に完成です。東名運河は、東名130歳の歴史。時代は、川や運河が日常生活や路、日常移動の幹線移動手段でした。

明治35年(1902)5月29日、盛岡中学校の修学旅行(石巻、松島、塩釜、仙台)で、石川啄木も東名運河を通過しています。前日は真夜中に盛岡駅から日本鉄道奥州線に乗り、翌朝、狐禅寺から北上丸に乗り、午前6時45分出発、北上川を下り、午後2時30分石巻到着です。翌日は細雨、午前7時に宿を出て新橋から乗船、16歳の

東名運河 130年 ~啄木の旅~



↑昭和初期の東名運河(野蒜駅付近)

野蒜を知る旅

啄木は北上・東名運河をこう記しました。「ここは運河である。両岸はゴマメの花、赤い野薔薇の花などが咲き競うて、そばなる雨に限りもなく美しく見える。自分等は濡るも厭わずに甲板に立って、刻刻に変わりゆく景色を、あかず眺めた。野をすぎて、さやかな塩田がある所にゆくと、画いた様な松原が、雨の中に見えて、其間を夢の様に淡く立ちのぼる幾条もの煙、これが塩焚く海士の細い細いなりわいの煙かと、自分までが心細く感じた。一色鮮やかな前半に比べ水墨画のような後半部は、明治21年に亀岡の人々が開墾した塩田の姿でしようか。開墾の経緯は赤崎山の先端に残る「亀岡塩田増墾の碑」にあります。その話は又の機会に。船は午前11時30分松島到着、翌日は塩釜、さらに仙台に入り、6月1日午前1時に盛岡帰着とあります。

「盛岡中学校校友会雑誌」第四号 明治35年7月12日(啄木全集中参考資料)より

野蒜築港ファンクラブ 松川清子